

パックご飯を製造 相馬屋が檜葉に新工場 被災地域の営農後押し



小名浜大原で、米の卸売り、小売り販売を行う相馬屋（佐藤守利社長）は十一月末、双葉郡檜葉町で進めていた、「無菌化包装米飯（パックご飯）」の製造工場のしゅん工式を開いた。

新工場は今年、創業百周年にあたる同店が、「福島県高付加価値産地展開支援事業」を活用して、同町の工業団地に建設。敷地面積は一万一千平方メートル、延べ床面積は約三千二百平方メートル。一時間あたり最大

八千食分の生産能力を持ち、総工費三十億円をかけて完成した。

同工場では、主に被災十二市町村の米と県産米を使用した「ふくふくご飯」と、国内産米の「おいしいご飯炊きあがりま

した。」の二種類を製造する。被災地域で生産されたコメを使用することで、同地域の営農再開を促進。生産、流通、販売が一体となった同地区での産地形成を目指す。工場が安定的に稼働する三年後には、被災十二市町村の米だけで年間千六百七十トン、約六十万食分



しゅん工式であいさつする佐藤社長

檜葉町に完成した新工場



を使用する見込み。

佐藤社長は、「被災地域の営農再開を後押しし、三年後までに海外での販売を実現することを誓います」と、新工場にかかる熱意を語っていた。

オンラインで販売も

また、同店は併せて、米とパックご飯を販売するオンラインストアもオープン。アドレスは <https://sonnaya.bse.shop/>、またはQRコード（右参照）。

また、同店（電話 七三〇〇七八）まで。

東日大で日中韓

シンポジウム開く

学校法人昌平賢（緑川浩司理事長）が運営する東日本国際大学と、同大東洋思想研究所は十一月末、同大で、「第十回日

中韓国際学術シンポジウム」を開いた。

シンポジウムは、同大、中国・山東大学、韓国・成均館大学の三校が、各国の代表として集まり、儒学をはじめ東洋思想全般について意見交換、発表するために開かれている。

緑川理事長は冒頭、「コロナ禍などもあり、四年ぶり（の開催）、青島（チンタオ）以来、会えるのを楽しみにしていた」とあいさつ。「危機の時代を乗り越える思想の力」と題して、AI（人工知能）の活用、メディアのあり方など幅広く取り上げ、講演した。

山東大学からは傅永軍教授、成均館大学からは辛正根教授らが来日し講演。併せて、東京大学の山脇直司名誉教授が「現代の危機を克服するための哲学思想の役割」と題した特別基調講演を行った。

日中韓、三カ国から集まった学識経験者らは互いに交流を深め合っていた。



シンポジウムの冒頭、基調講演した緑川理事長

ヴェガが閉店セール 人気のバッグなど提供



閉店セールを行う「ヴェガ」店内

いわき駅前再開発ビル「ラトブ」二階、バッグギャラリー。ヴェガは二〇二四年一月二日から二月二十日まで、閉店売り尽くしセールを行う。

ヴェガは一九七三年、旧平駅ビル「ヤンヤン」で開店、九四年にいわき駅名に変わり二〇〇七年、同ビルが閉店したのを機にラトブに移転。震災、コロナ禍と紆余（うよ）曲折あったが同日、五十一年の歴史に幕を下ろすことになった。

同店は期間中、Dakota（ダコタ）を中心に、「FRAME WORK（フレームワーク）」やELLE（エル）など人気のバッグや財布を特別価格で提供する。

初売りの同二日は午前十時～午後七時に営業。問い合わせは、同店（電話 二二一〇六〇八）まで。